

児童書ギャラリー

Gallery of Children's
Literature



明治から現代までの日本の子どもの本の歩みをたどる常設の展示室です。児童文学史、絵本史それぞれについて、各時代の特色や代表的な作品を紹介しています。

およそ1,500冊の展示資料は、手にとってご覧いただけます。



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

児童文学史

第1章 子どもの文学のはじまり

日本で最初の少年雑誌『少年園』が創刊されたのは、1888(明治21)年です。つづいて、『小国民』や『少年世界』、『日本少年』、『幼年の友』などの雑誌も創刊されました。『少年世界』は、巖谷小波が主筆をつとめ、明治期を代表する雑誌になります。

巖谷小波の『こがね丸』(1891年)は、子どものための創作児童文学としては最も早いものですが、小川未明の第一童話集『赤い船』(1910年)に近代児童文学の起点を見る意見もあります。小波の「御伽噺」が説話的だったのに対し、未明の「童話」は、詩的で象徴的なことばでつづられたメルヘンの世界でした。

第2章 『赤い鳥』創刊から戦前まで —「童話」の時代

『赤い鳥』は(中略)子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための作家の出現を迎える、一大区画的運動の先駆である。」—これは、『赤い鳥』の「^{モットー}標榜語」と題された、創刊の辞の一節です。「子供の純性」ということばに、大正期の児童観(これは、その後、プロレタリア児童文学の作家・評論家、榎本楠郎に「童心主義」と批判されるのですが)があらわれています。

『赤い鳥』につづいて、『金の船』(のち『金の星』と改題)、『童話』、『おとぎの世界』など、いろいろな児童雑誌が刊行されます。これらを舞台に、子どもの「童心」を描く「童心文学」が開花し、童話や童謡がさかんに書かれることになるのです。

第3章 戦後から1970年代まで —「現代児童文学」の出版

長い戦争がおわったあと、作家たちは、戦後の新しい現実にふさわしいテーマを描き出す方法をすぐには見出すことができませんでした。

日本の現代児童文学が成立したのは、佐藤暁(のち、さとると表記)の『だれも知らない小さな国』、いぬ

いとみこの『木かげの家の小人たち』が刊行された1959(昭和34)年だと考えられます。

童話が詩的で象徴的なことばで心象風景を描く短編だったのに対して、現代児童文学は、散文的なことばで子どもをめぐる状況(社会)を描く長編になりました。現代児童文学は、かつて経験した戦争も、戦争を引き起こす社会についても書かなければならなかったのです。

第4章 1980年代から1999年まで — 児童文学の現在

出版期の現代児童文学は、子どもをめぐる問題は子どもの力によって必ず乗り越えられ、状況は変革できるという理想主義で書かれていました。ところが、その後、問題は必ず乗り越えられるかどうかかわらないと考え直されるようになります。理想主義を見直すきっかけになったのが那須正幹の『ぼくらは海へ』(1980年)でした。困難な現実をのがれて、ちっぽけないかだで海へ出て行ってしまふ少年たちを描いた長編です。

その後の児童文学は、理想主義という「決まりきった物語」をのがれて、多様に展開し、2000年代へとつづいていきます。

第5章 21世紀の児童文学

現代児童文学が、子どもたちから遠ざけられていたテーマ(「性」や「死」や「家庭崩壊」など)を、むしろ人間の本质にかかわることとして積極的に描きはじめたのは、1970年代の後半です。少なくともテーマの面では、「児童文学」は、「文学」とかわらないものになっていきました。

様々な主題を深めることになった現代児童文学の読者層は、中高生へと広がり、大人の読者たちも呼び込まれてきます。ここに、YA(ヤングアダルト)という領域が形成されました。YA=若者の文学への発展は、児童文学の豊穡ともいえます。同時に、児童文学の本来の読者を小学生と考えるならば、児童文学の空洞化ととらえることもできます。

日本の子どもの文学は、どこへ向かうのでしょうか。

(監修:宮川健郎)



特別閲覧室



児童書ギャラリー

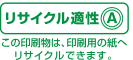
国際子ども図書館レンガ棟は1906(明治39)年に帝国図書館として作られた建物を、保存・改修して利用しています。児童書ギャラリーは帝国図書館時代の「特別閲覧室」で、館長が特別に認めた研究者が使っていました。書架以外は帝国図書館時代の状態を復元しています。漆喰で仕上げられた4本のオーダー(柱)が印象的な作りになっています。

国立国会図書館 国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

TEL 03-3827-2053 <https://www.kodomo.go.jp/>

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

 リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

絵本史

第1章 明治から大正まで 黎明期の絵本

明治初期から中期には、江戸時代の絵草紙の流れをくむ「赤本」や、欧文の「ちりめん本」が刊行されましたが、まだ今のような「絵本」という概念はありませんでした。

富国強兵・殖産興業政策のもとで、印刷技術の発展や流通の変化がおこります。また、幼児教育の制度も整備されていくなかで、本のつくり手たちは、子どもにわかりやすく面白いものをとどげようと、さまざまな試みをおこないます。

そして、開国からおよそ20年後には、西欧の文化と日本の伝統的な技術を融合させた、画期的な翻訳絵本が誕生しました。

1900年代に入ると、カラーの出版物が急激にふえ、子どものための「画帖」や「絵ばなし」とよばれる絵本がつくられていきます。

第2章 大正から戦前まで 童画の時代

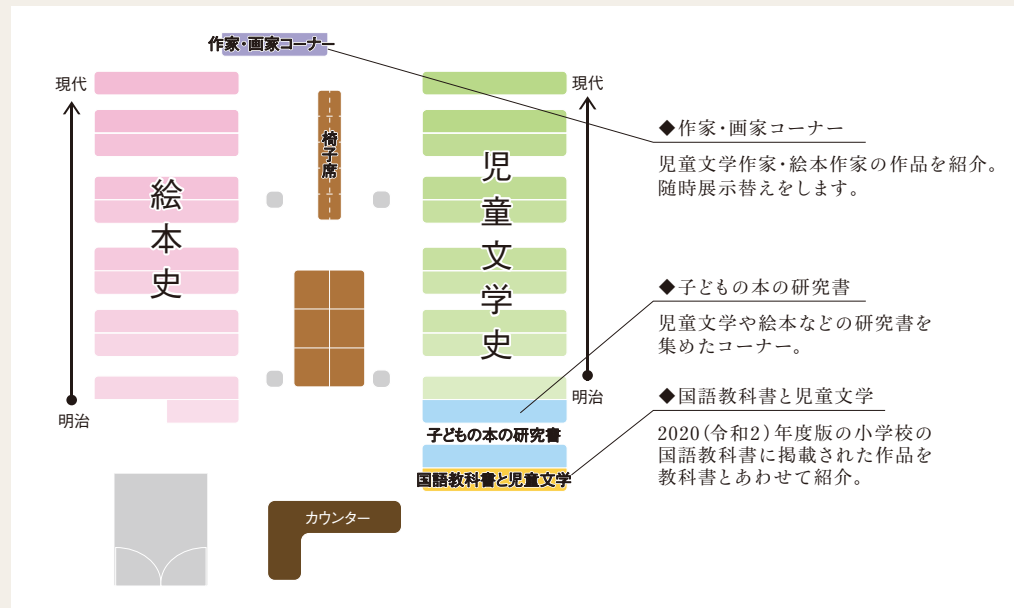
大正期、子どもの個性や自我を尊重する、児童中心主義にもとづく自由教育がさかんにになりました。また、子どもの無垢な心を大切にしようとする「童心主義」が広まり、子どもの本の世界でも、芸術性を追求するようになります。

『赤い鳥』など児童文芸雑誌と並行して、幼児から楽しめる、質の高い絵画を中心とした「絵雑誌」が次々と創刊されました。西洋美術や日本画を学んだ画家たちが競って活躍し、単なる挿絵ではなく独立した芸術としての「童画」が誕生します。

戦争の時代に入ると、絵雑誌は衰退しますが、童画の流れは戦後の画家たちにもひきつがれていきました。

第3章 戦後から1950年代まで 現代絵本の出発

敗戦後まもない時期から、子どもたちの心を満たそうと、とばしい物資をつぎこんで、絵本や児童雑



誌が次々と刊行されました。

1950年ごろから出版界の再編がはじまります。編集者・研究者・翻訳者たちが力をあわせ、新しい日本の絵本をつくりだそうと模索します。

1953年には、翻訳絵本を中心としたシリーズ「岩波の子どもの本」が創刊され、その後の絵本の出版に大きな影響をあたえました。1956年に創刊された「こどものとも」は、幼児に向けた1冊1話の「月刊物語絵本」という画期的な試みでした。

第4章 1960年代から70年代まで 絵本黄金期

現在、日本でミリオンセラーとなっている絵本には、『ぐりとぐら』(1963年)や『いないいないばあ』(1967年)をはじめ、60年代に出版されたものが最も多く、次いで『100万回生きたねこ』(1977年)など、70年代の絵本があります。

60年代から70年代は、日本の絵本の黄金期といわれます。戦後、欧米の絵本づくりに学んできた成果を、60年代の絵本にみることができます。高度経済成長を背景に、革新のエネルギーに満ち、生き生きとしたよこごびを伝える絵本は、読書活動の広がりとともに

浸透していきました。

70年代には、絵本の出版点数も年間1,000点を超え、「絵本ブーム」が到来します。絵本の専門誌『月刊絵本』が創刊され、児童書専門店が各地にできました。

また、「ボローニャ国際絵本原画展」を皮切りに、絵本原画展が美術館でも開催されるようになりました。

第5章 1980年代から90年代まで 個と表現の追求

80年代に入ると、子どもを取り巻く社会環境が変化してきます。少子化に加え、テレビゲームが普及し、アニメ、ビデオ、漫画が爆発的に広がりました。「子どもの活字離れ」が語られるようになり、70年代絵本ブームは収束していきます。

絵本ブームを経て、絵本に対する概念は大きく変わりました。作家たちは、従来の絵本の常識にとらわれない、個性的な新しい表現を追求していきました。

一方で、80年代は、戦後から積み上げてきた絵本研究の実りの時期でもありました。日本の絵本の国際的評価も高まり、1980年には赤羽末吉が、84年には安野光雅が国際アンデルセン賞画家賞を受賞します。

90年代に入ると、絵本の世界をもっと活性化しよう

電子展示会

「日本の子どもの文学
—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み—」



<https://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html>

インターネットで、明治以降の日本の子どもの本の歴史をたどる電子展示会を公開中です。およそ450点の作品を紹介しています。

とする動きが、絵本作家、編集者、研究者たちのなかからおこります。絵本をアートとしてとらえる見方も、広がっていきました。

第6章 21世紀の絵本 新しい希望のかたち

2000年代のはじめには、ふたつの流れの、小さな絵本ブームがありました。ひとつは世紀末のミリオンセラーが呼び水となった「大人の絵本ブーム」であり、もうひとつは家庭だけでなく集団を対象にする「読み聞かせ絵本ブーム」です。その背景には、2000年の「子ども読書年」を契機とした読書活動の広がりがあります。これらの動きは、絵本の読者層を広げると同時に、出版の傾向にも影響をおよぼすようになりました。

絵本は時代の空気、社会を反映する文化でもあります。何十年も読み継がれ、評価のさだまった古典絵本には確かな魅力がありますが、ここでは、今を生きる大人が、今を生きる子どもたちに向けて送り出す、21世紀の絵本の新しい表現と傾向に目を向けてみましょう。

(監修:広松由希子)